

会
議
録

企 画 会 議 そ の 2	企 画 会 議	ギ ヤ ル リ ン ガ ル
---------------------------------	------------------	---------------------------------

19	15	3
----	----	---

ギャルリンガル

「わいわい」

「がやがや」

「えー。みなさんそろわれましたか」

「営業部長が本日は出張のため参加できないとの連絡がありました」

「それでは営業部長には営業第二課長の方から改めて今日の会議の要約を報告していただくということ、それでよろしいですか」

「いいでしょう。始めてください」

「え。それでは第十四月第七週の定例企画会議を始めさせていただきます。今日は開発第二課の方で進めてきた新製品の試作品ができあがっておりますので、そのプレゼンとですね、え、今後の商品化に向けての方向付けを検証しようということ、第二課長の方から説明していただきます」

「ちよっと待ってください。今回の商品開発についてはもちろん開発部のノウハウと尽力がありましたけれどね、そもそもその発端のアイデアは企画部から出たものであるし、開発方向のコンセプトについても企画主導で作りに上げてきたものであるから、その点について

はプレゼンの前に念を押していたただかないと」
「まあまあ。そういうことはわざわざ口に出していわなくてもここに
いる人間はみんなわかっていることだから。ね。だからあえて言
わなかっただけで。企画の立場というものはみんなわかっているか
ら。それでいいんじゃないの」
「まあ専務にそう言っていただければ別に私だってこだわることは
何もないんですけれどね」
「で。よろしいでしょうか」
「説明は開発部長がするんじゃないの」
「私でもいいんですが、これは実際に開発と試作にまでこぎつけた
第二課長の方がよくわかっておりますので」
「あ、そう」
「それじゃ、課長、お願いします」
「はい。え。お手元に資料があると思います。簡単の説明いたし
ます。いうまでもなく我が社は自動翻訳システムの先駆者であって
今日でもシェアも五十パーセントを占めております。市場そのもの
の大きさというものが頭打ちになつてきた観があります。各専門分
野のプロ向けの翻訳サービスでもヒット率はナンバードワンを誇りまし
て」

「そう言うことは今さらいわなくていいんじゃないのかな」
「あ。失礼しました。申し上げたのは我が社の技術力と営業努力
で業界ナンバーワンの地位はすでに確かなものになった。しかし問
題は業界そのものの大きさに限界がある、これからはニーズを自ら
創出して新しい市場を開拓していかなければならない。そこで着眼
したのがプロ仕様というよりもエンドユーザー、今まで我が社とあ
まり関係のなかった消費者サイドに我が社の技術を展開していくと
いうことであります」
「そこまでは企画の出したペーパーに指摘してありますね」
「企画部長、みんなわかっていることだから言わなくていいといっ
ただろ」
「はあ。失礼しました」
「え。続けさせていたきます。翻訳とは何か。つまるところ共通
理解に対して言語の壁というものがあつたのを橋渡しして異文化間の
コミュニケーションを形成するためのものでもあります。外国語とい
うものは多くのひとにとって難関でありまして、英語教育がこれだ
け盛んになつてもいまだに英語の読み書きもできないというひとが
大多数です。我が社が自動翻訳の市場でこれだけのシェアを獲得し
たのも背景には外国語教育の貧困というものがあつて」
「論点がずれてきているよ」

「あ。はい。話を進めずと外国語教育には注意が払われても、国語教育にはかえって無関心な側面が強いということがある。母国語において見えない、同じ文化を共有している文化の中であって、お互いに理解不能な文化が生じている。同一文化の中であって、お互いに理解不能な文化が生じている。話をわかりやすく、今回の試作品を開発した出発点でありました。話をわかりやすく、今回の試作品をこの人間には若い世代の話している言葉がわかからず、若い人はここにいらつしやるみさんあるいはもつと上の世代の話して、来特に顕著な傾向になつてきました。昔から若い人間は自分たちのあいだでしか通じない隠語というものを作るのが好きでありました。たとえば『かっこいい』という言葉も昔は若い世代だけの流行語だったと聞いています。しかし今日見られる問題は、そのような隠語あるいは流行語という範囲を超して、全くの異文化を形成しているということがあります。お互いの言語が理解不能だという問題は、世代相互の文化の違いにまで発展しているのではないかとすれ、そこにはお互いの言語を相互に翻訳するという潜在的なニーズがあるのではないかと着目したわけです」

訳技術を応用して、話を通じるようにしようということか」

「まさにその通りです。単に自動翻訳技術の応用というだけでなく、若い人間のあいだで使われている単語や言い回し、多くの語彙のサンプルを集める市場調査を行いまして、同時に既存の音声認識エンジンを用いるために最適化して組み合わせるといった試行錯誤を行いまして、今回の試作品が完成しました」

「このノートパソコン？」

「もちろんエミュレータとして開発したもので、商品パッケージとしてどのようなにするかはフィージビリティスタディとIPUの開発コストなどが絡んできますが」

「マシンパワーがこれくらいでいいということかなあ」

「マシンそのものは特に手を加えていません。正直な話、研究室で使わなくなった型落ちのマシンです」

「ふうん」

「実際に動かしてみてもらった方がいいですね」

「はい。それではさっそく」

「あの。音声認識は課長に最適化されているんですか」

「いや。最適化しなくてもある程度の精度が出るのが、今回の開発の主眼だったから」

「いいいから始めてくれ」

「はい。このマイクを使います。入力します。

「てめえしかとしてんじゃねえよ」

「うわっ」

「なんだなんだ」

「若い人の言い方をまねしましたので」

「えーと。結果はこのモニタに出ているのかな」

「はい。上のラインが入力したものの認識結果ですね」

「ええと。てめえしかとしてんじゃねえよ。これはいったい何なの

かね」

「下のラインに翻訳結果が出ております」

「私を無視してとぼけていないで私のいうことに注意を払いなさい。

ほんとうかなあ。何だか喧嘩を売っている言葉のように聞こえたん

だけれど」

「言葉の意味としてはこうなるのです。意味が印象と異なるのはど

んな言語にも言葉そのものの意味とその言葉が発せられる状況の組

み合わせで、副次的な意味が付加されるといふのは当然のことであ

りまして」

「ほかにはどうなるのかな」

「はい。では別の例で。

「ぶちようきもくい」

「どれどれ。変換は事実上即時ですね」

「結果は」

「これですか。なになに。部長あなたは陰気で印象がはっきりして
いなくて気持ち悪いひとだ」

「課長、君は私を馬鹿にしているのか！」

「あ。失礼しました。あくまでも若い人の言い回しの例に過ぎませ
んのぞ」

「まあ部長、若い人の語彙にはこういうネガティブなものが多いの
だからしかたがないよ」

「恐れ入ります専務」

「これは音声合成で出力できますね」

「はあ、もちろんそれは既存のモジュールを組み合わせれば何でも
できます」

「どうなるのかなあ」

「企画部長、何かありますか」

「技術的には企画から出した方針の通りで問題ないと思うのですが、
これらの購買層というのがどうなるかですねえ」

「それはあれだよ、もちろん若い人と話す機会が多いのに話を通じ
なくて困っている大人ならほしがらる。早い話が私たちがすでに
自分の子供と会話ができないだろ。たとえばあれだ、AKB四十八

が何人のグループなのか君答えられるか」
「何ですかそのAKB四十八というのは」
「歌って踊る子供向けの女の子のグループです。テレビの番組に出
ていますが、いえその頭の悪さ勘の悪さというのがすごいもので」
「知らないなあ」
「何だか大の大人が子供に迎合するようで釈然としませんねえ」
「しかし自分の子供が理解でいなくて悩んでいる親なら買うでしょ
うねえ」
「ということはこれは大人が買って大人が使う商品という方向付け
になるんでしょうか」
「いやいや、今ここでいきなりそう言う結論は出さなくていいんだ
よ」
「しかし若い人は買わないでしょう。そもそも彼らは自分たちのあ
いだでしか通用しない言葉を使ってそれで優越感に浸りたいんだか
ら」
「とするとこれはたとえば大人が使うケータイ電話に組み込むチッ
プにするとか、それに音声認識と音声合成の機能を組み込むとか、
そういう感じですかねえ」
「いや。そうじゃないですねえ」
「企画部長、何か出ましたか」

「これはです、ね、買うのはもちろん大人です。ただし大人が買って子供につけさせるんですよ」

「自分の子供という意味ですか」

「自分の子供なんかじゃないんですよ。街にいるそこらの子供たちと話がしてみたいなあと思っただけです。アクセサリーだといって自分の気に入った子供に買わせるんです。自分の子供だけだったら市場なんかたかか知らなくても需要が発生しますからね」

「アクセサリーとおっしゃいます、身につけている位置によって音声認識の精度が落ちると思うのですが」

「それはもちろん首に巻くんです」

「首？」

「チョーカーっていうアクセサリーがあるんです」

「そう言えば見たことあるかな。あの首輪みたいなやつ」

「買い与えた大人はその子供を自分の独占物であるぞと宣言できたようなものだし、買ってもらう方にはとにかくそれが流行なんだと思わせるようなキャンペーン張ればいいんです。子供にねだられたら今どきの大人は何でも買ってやりますから」

「なるほどね。そういうことをすれば、自分は若い人と話が通じるんだ。いつでも若い人たちの流行最先端について行けるんだという優

越感も持てるわけですね」

「しかしなあ、それは我が社の目指している異文化のあいだの架け橋というモットーとどういう関係があるんだろうか」

「異文化といえれば異文化でしょう。いちばん身近にいながら言葉の通じない不気味な存在と話ができるんだから」

「商品化の方向については企画担当部門と代理店のあいだで煮詰めてもらえばいいでしょう。開発部長、商品化できるめどというのはどれくらいですか。精度を上げるとか語彙を増やすとかまだいろいろな作業が残っているでしょうから」

「技術面の開発は終わっております」

「終わっている？このアイデアが出てから半年にもなっていないじゃないか。翻訳エンジンがそんなに早くできるわけがないだろ」

「それですが、若い人の使う語彙というのが、およそ三十程度でしたので。関西語を東京語に翻訳するエンジンの開発にかかったマシンのパワーの百分の一程度です」

「たった三十？」

「我々もあきれております」

「はあり」

「企画部長、この商品のネーミングはどうするかね。君なら何かうまいアイデアを思いつくだろう」

「ギャルリンガルというのはどうですか？」

「何だそれは」

「ギャルというのは最近の若い女性を指す言葉でして、これを使えばギャルとも話ができるという意味で、受けると思うんですがね」

「それを首に巻くわけか」

「どこかで聞いたような気がするなあ。パクリじゃないのかなあ」

「いえいえそんなことはありませんよ」

「それではこのプロジェクト、えー、仮称ギャルリンガルの今後の商品化については、開発二課を中心に実用化の面で技術的な問題を煮詰めていくというところで、商品パッケージについては企画部の方で検討していただくということ、これでよろしいでしょうか」

「いいだろう」

「いいでしょう。企画部と研究部は商品化について市場調査も追加することを含めて連絡調整を絶やさないようにしてください」

「わかりました」

「わかりました」

「では今日の会議はここまでといたします。お疲れさまでした」

「ねえ部長」

「何ですか専務」

「ギャルっていうのは私が学校で習ったときはたしか、すべたとか

淫売とかはすっぱ女とかパンパンとかそういう蔑称だと教わったんですかね。今のひとはギャルって呼ばれても何とも思わないんですか」

「知らないだけですよ。品性の問題ではなくて教養の問題でしょう。早い話が無知なのか馬鹿なのかどちらかです」

「情けない世の中ですねぇ」

「そうですねぇ」

企画会議

「お笑い芸人ももうそろそろ飽きたなあ」

「あいつら仲間内の雑談していればギャラがもらえるところでいいからねえ」

「なんかこう次の新機軸になるようなものはないかねえ」

「落語はいけませんか」
「落語はさあ、本当に聞かせようとしたら最低でも二十分くらいはかかる。粋としてはでかすぎるんだよなあ。あれってお笑いって言うより古典芸能だからなあ。ほかに使い回しできるようなタレントになるかっていったらそういうのは少ないからなあ」

「お笑い芸人でもう少し何とかするネタって言ったら考えてみたんですけれどね」

「お。何かあるかね」

「まずお笑い芸人をひとり拉致するんですよ」

「拉致？」

「言葉がまずいなあ。せめて誘拐にしておくんじゃないの」
「わかりました。まずひとり誘拐するんです」

「それでどうするの」
「着ているものを全部ひんむいて裸にします」
「うんうん」
「で、体中の毛を全部そり落とします」
「上の毛も下の毛も？」
「下もそのの？テレビには映らないから関係ないんじゃないの」
「徹底的にやりますっていうことで下の毛も剃った方がおもしろい
んです。眉毛を剃り落とすのがいちばんおもしろい顔になるんです
が」
「それから？」
「スキンヘッドになった頭のとっぺんに『馬鹿』でも『はげ』でも
いいから刺青するんです」
「それは面白いけどさあ、刺青までやると傷害罪になっちゃうから
なあ」
「それじゃあ三ヶ月くらいとれないペンキでもいいんじゃないのか
な」
「うんうん」
「下の方にはですわね、ちょうど陰毛の生えているあたりに『粗チン』
とか女なら恥丘のうえに『ヤリマン』とか刺青、じゃなくてペンキ
で書いておくんですよ」

「いいねえ。お笑いタレントじゃなくてそういう目に遭わせたい女に心当たりがあるなあ」

「アナル川ゼロですか？」

「お。わかるかね」

「あのほか、一流大学出てるんです頭いいんですしか言うことがなくてへらへら笑っているだけだからなあ。そういうことでもないと利用価値ないものなあ」

「で、できることならそういう状態のまま、六本木の交差点で裸のまま放り出すんですよ」

「何だか企画って言うよりおまえさんの復讐の話に聞こえるねえ」

「で、誘拐するところから表に放り出すところまできっちりとりえれば面白い絵になると思うんですよ」

「いけるかもしれないなあ。ただ公然わいせつの片棒担ぐのは困るなあ」

「それはスタジオの中で観客の前でやるとかさ、まわりは全部関係者だから公然じゃないって言い逃れするとかさ、何とかなるんじゃないの」

「乗り気ですねえ」

「一度くらいやってやればいいんだよ。あいつら最近増長してるか」

「でも何も前提がないのにいきなり丸裸で剃毛っていうのはちよつと無理があるかも」
「それなら何かの罰ゲームにすればいいんじゃないの。かえってそういうので話題になれば喜びそうなの落ち目のやつ選べばいいじゃない」
「じゃあこれでやってみましょうか」
「そうしようかしよう」
「具体的に誰でやるかどうかそのあたりはよろしくね」
「はい！ありがとうございます！」
「かくして誘拐・傷害・公然猥褻の三拍子そろった事件が始まることになる。」

企画会議 その2

「えーとね、今日はね、テレビはいつもひとのアラ探しとか興味本位ののぞき見しかしていませんという批判があるところからあつたのでね、そんなことはありませんテレビは社会の役に立っていませんというところを見せるようなね、そんな企画がないかみんなに考えてもらいたいんだけどね」

「いきなり難しいですね」

「あるところってどこか聞いちゃいけないんですね」

「そうそう」

「この間のホームレス特集も、おまえらこんな惨めな人間のくずになりたくなかつたら、サービス残業我慢して安い給料も我慢しろつて、ちゃんとメッセージは伝えたじゃないですか」

「それがね、メッセージだけじゃなくて本当に具体的に何かしているところを見せなきゃいけないんだよね、今回は」

「的外れな注文だなあ」

「それは言っちゃいけないの。みんなそう思っても口には出さないんだから」

「はい。わかりました」
「ホームレス関係でならひとつあるんですが」
「お。何かあるかね」
「まず新宿西口公園で浮浪者、じゃなかったホームレスをひとり誘拐するんです」
「何だか君の話はいつも誘拐から始まるなあ」
「それでですね、そのホームレスを吉原の個室付き特殊浴場に連れて行くんです」
「ホームレスのセックスは放送できないよ」
「性交渉ではなくてですね、おねーちゃん二人がかりでそのホームレスを徹底的にきれいに洗ってあげるんです」
「うんうん」
「それからきれいな服を着せて床屋を呼んできちんと整髪するんです」
「それだけ？」
「いえいえ、それからですね、そのホームレスを大病院に連れて行って徹底的に精密検査してやるんですよ。できれば点滴なんか打っているシーンがあるといいんですけれどね」
「もしもなんか病気があったら話が長くなっちゃうんじゃないの」
「ですすからあらかじめ健康そうなホームレスを選んでおけばいいいん

です。それでですね、そのホームレスを銀座の志摩に連れて行って一流の懐石料理のフルコースを食べさせるんです。そのときにホームレスがこんなうまいものは生まれてはじめて食べたって、涙を流すといい絵になるんですけれどね」

「そんなのは演出でどうにもできるんじゃないの」

「そうですねはい、やらせればいいんですね」

「やらせは禁句だよ」

「はい失礼しました」

「それはあれかな、六本木のイル・テンポみたいなイタリア料理でもいいわけだな」

「それは見た目が豪華になればなるほどいい絵ができるわけですよ」

「君イル・テンポにコネあるの？」

「いや何となく思いついただけ」

「続けます。それでその晩は浦安にある一流のシティホテルのスイートに泊めます」

「それだけだと、ただホームレスが一生涯経験できないようなことをしてあげただけになるんじゃないか」

「ですから次があるんです。そのホームレスにですね、パソコンの講習を受けさせます。社会から落ちこぼれてしまった能なしでもパソコンさえ使えるようになれば立派に社会復帰できますというメッ

ページになります」

「パソコンそんなに簡単かなあ」

「それはさあ、講習を受けたらこんな風にパソコンが使えるようになります。実際に使ったって、絵を編集で作ればいいだけなんじゃないの。実際にパソコンが使えるようになるまでずっと講習受けさせるわけにはいかないんだから」

「そうですね。でとにかく彼がパソコン使えるようになって修了証を手に行っている絵を撮るわけです。それから彼を銀座の英國屋に連れて行ってオーダースーツを作らせます」

「英國屋のオーダーまで金が出せるかなあ」

「それは必要経費で落とすかタイアップにすればいいんじゃないの」
「で、ホテルで一晩ぐっすり寝かせた後は、当座の生活費と着替えと彼名義のケータイを持たせて、ホテルの玄関でみんなで拍手してホームレスを送り出すわけです。こうやってテレビのチカラでひとりの浮浪者、じゃなかったホームレスが立派に社会復帰できました、そういう美談になると思うんですがどうですか」

「ちよっと待てよ、飯食わせてきれいな格好にして小銭持たせて送り出しただけじゃ社会復帰にならないよ。住む家の手当をして仕事の世話までしなかつたら仏作って魂入れずだよ」

「それは番組の趣旨とは関係ないからどうでもいいんじゃないの。」

最後にみんなに拍手で送り出される絵がいちばんの売りになるんだから、そこから先は関係ないよ。それとも君が個人的にそこまで面倒みるか」

「いやいやとんでもない」

「この一部始終をですね、きれいなタレント、そうですねえ、ばアナル川ゼロに取材させるわけです。密着レポートとしてですね、できれば彼女が感極まってそのホームレスとセックスすれば話題になるんですが」

「そんなのは金やれば何でもするよあの女」

「それよりも腹上死の心配したほうがいいなその場合」

「そんなことはどうでもいいんだが問題があるな」

「なんですか」

「西新宿のホームレスは結束が堅いんだ。ひとりだけ連れてこようとしても簡単にはできないぞ。それに取材が終わってそのホームレスを元の場所に放り出したら、全員で復讐にくるかもしれない」

「そういうのが面倒ならさあ、そこら辺にいる売れないタレントかA Dに汚いかっこうさせてホームレスですっていうことで番組作ればいいじゃないの。そうだ、その方が番組の意図もよくわかるはずだからきつと仕事が楽だぞ。これが初めてってわけでもないんだし」

「じゃあそんなところで編成に出す企画書書いておいてね。よろし

「く
「お
「お
「つ
「つ
「か
「か
「れ
「れ
「さ
「ま
「あ
「